
魔法少女リリカルなのはStrikerS 時空を越えた槍使い

八神刹那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers 時空を越えた槍使い

【Zコード】

Z0473BA

【あらすじ】

弟子を庇いその命を散らした如月玖音は何の因果か別世界ミッドチルダへ！そこで玖音は機動六課で働くことに。新たな道を歩む。だが、その世界には宿敵“紅き傭兵”、“殺戮の神”が牙を剥く！？玖音は世界を覆う巨大な闇を打ち碎くことができるのか…？玖音の新たな戦いが今始まる！

これは魔法少女リリカルなのはStrikers 時空を超える

一槍使い のリメイク版です！前作では描けなかつた部分や訂正する部分を描きます！

プロローグ

ある世界に一人の“侍”がいた。

その男は戦えば最強の武人。策を練れば今孔明と呼ばれる男だった。

だが、その男は弟子を庇いその命を終えた。

男は4人の弟子にそれぞれ己が極めた“槍術”“剣術”“体術”“魔術”をできる限り伝えた。

残された4人の弟子は彼の意思を引き継ぎ一人前の戦士となつた。

その男は戦場で“一刃の槍手”または“槍鬼神”呼ばれ仲間を助けた。

ある時は策を練り、ある時はともに戦い、またある時は1万の大軍をたつた一人で引き受け戦つた。

まるで英雄のような男だった。

その男の名前は　如月　玖音。　第十七代目　の十三隊一番隊隊長である。

これは、その男が己を命を終えてからの物語である・・・・。

第壹話 出会いと話し合い

次元世界ミッドチルダ。

古代遺物管理機動六課の医務室。ここで寝ていた1人の青年が目を覚ました。

「…………」
「死んだよな？」

青年の名は如月玖音。玖音はしばらく隠りながら考えると

「ま、いいか！ 生きてるし」

と簡単に考えをやめベットから起き上がり勝手に部屋を出る。
部屋の外は何処かの建物のようだ。

「…………」
「完全に…………あそこは全

部木製だし」

玖音は裸足で建物内を歩き回る。格好は患者着の患者服。一目で分かる格好だ。

「うーん…………」
オレはサーディスのキリバチで斬られてそれからあいつを討つて、それからオレ粒子なったよな？ なんでこんな場所にいるんだ？」

また考える。すると目の前の通路から3人の少女が現れた。目が合う。

数秒間の沈黙。

ダツー！

「…………」

玖音は本能的に逃げ出した。

「ちょ！？ 待ってやー！」

茶髪の少女が玖音を止めようとしたが玖音は逃げた。

「待つてトセー！！」

「ケガしてるんですよ！！」

亜麻色の髪と金髪の少女が玖音を引き止めるが玖音は建物内を走る。「いひいつシチコエーションだとオレたいてい面倒ごとに巻き込まれるんだよね・・・・。だから、逃げる！――」

玖音はブツブツ言いながら走る。

玖音は約10分間走り続けた。2人の少女はまだ追つて来る。その前に玖音はまだ建物から出られずにいた。何度も同じ場所をグルグル回っている。

「止まつてください！――」

亜麻色の髪の少女が止めようと叫ぶ。

「だつてら追つて来るな！――追われたら本能的に逃げるだろ！――」

玖音がロビーを飛び降りる。

「なのは！バインド！」

金髪の少女が亜麻色の髪の少女に叫ぶ。

「うん！」

なのはと呼ばれた少女が玖音に向けて手をかざすと

キイーーン

といつ音とともに玖音の足に光の輪が絡まり着いた。

突然足を封じられた玖音は

「なつ！？ダア――！？」

派手に転んだ。

「な、なんじやこりや！？」

玖音は両足に絡まっている光の輪を外そつと必死になつている。

「それは力じや解除できませんよ」

2人の少女が玖音の前に立つ。

「逃げたりしなければ名にも危害を加えませんから」

そこにさつきの茶髪の少女がやって来る。

「私たちは何にもしませんから。貴方のことを教えてくれませんか？」

「…………そんなことり腹減った」

玖音が言い切った。

「…………え？」

3人はまさかの言葉にア然と親しい。

20分後。

「イヤー。腹減つてから助かつたわ」

玖音は機動六課の食堂で少し遅い昼食を食べた。

「かなり食べましたね…………」

「カツ丼、天丼に鰻重…………それに餃子まで……」

それから5分後。

「私は機動六課部隊長のハ神はやてです」

と茶髪の少女が自己紹介する。

「高町なのは一等空尉です」

次に亜麻色の髪の少女が。

「フェイト・T・ハラオウン執務官です」

最後に金髪の少女が自己紹介する。

「オレは如月玖音。十三隊の一一番隊隊長だ。それよりここはいつた
い何処なんだ？さつきミッドチルダとかじくー管理局とか言う単語
が聞こえたけど。てか、オレはなんでこんなところにいるんだ？」

と玖音が3人に質問する。

「やつぱり次元漂流者やな……」

「ジゲンヒヨーリューシャ?」

「はい。まあ今如月さんが置かれている状況を説明しますね」

それから10分ほどはやで、なのは、フェイトの3人が玖音の置かれている状況を説明した。

話を聞いた玖音は腕組みをし

「よつするにこはオレがいた世界とは違つてことか……」

「やつなつますね。如月さんがいた世界が見つかれば帰る」とはで
きますので安心してください」

とはやでが言つと

「ああ！それはしなくていい」

と玖音が言い切つた。

「な、なんですか？」

なのはが尋ねる。

「なんでつて……ちょっとイロイロやらかしたからな。帰りたく
ないんだ」

「じゃあ。これからどうあるんですか？」

「どうするつて……オレが持つてた刀が2本あつたろ？それ

使つて傭兵でもやつて暮らす」

「如月さんは戦い慣れているんですか？」

「まあな。元の世界で13年戦つていたし」

玖音の言葉にはやは少し黙り

「だつたらお願ひがあるんですけど。聞いてくれませんか？」

「お願ひ？」

「はい。ぜひ如月さんの力を貸してください」

はやはその言つと頭を下げるた。

「ちよつ…? はやて…?」

「はやてちゃん！？」

それを聞いたフェイドとなのはが驚く。

「如月さんの話を聞く限りだとあまり野放しにはできないしそれにこの世界で傭兵するは大変ですよ」

「そうなの？ だつたら良いけど」

「しれつ」と言った。

「い、良いんですか？」

なのはが聞く。

「うん。別に構わないよ」

「簡単に決めたね・・・・・・」

フェイドが呆れる。

「ただし、少し条件がある」

「条件？」

「条件つて言つても部屋と賃金はちゃんと払つてこことこの部隊の設立理由を教えてくれ」

「最初の2つは約束できますが設立の理由は今はちょっと無理なんです」

「まあ、いいけど。あと、オレの刀返して」

「刀は隊舎を案内するときお返しします」

「わかった。最後にオレのことは玖音つて呼んでくれ。オレも名前で呼ぶから」

「そうですか。よろしくな玖音さん」

「よろしくね」

「よろしく」

3人がそれぞれ挨拶した。これが玖音の新たな戦いの始まりだった。

第3話 機動六課

4人は話し合いが終わり玖音ははやての案内で機動六課の隊舎を見学していた。

「へえー、なかなか設備が整つてんじやん」

玖音は機動六課の設備を見て感心する。

「まあ、イロイロ訳ありの部隊やから」

「へえー。オレは構わないぜ。訳ありつのは。次は?」

「次は玖音と一緒に戦うフォワード4人の訓練を見学しに行こうか!」

はやての後を付いていくと島に廃墟が広がっていた。

「おいおい。廃墟があるぞ・・・・・・」

「あそこが機動六課が誇る自慢の訓練場や。あれは実体のホログラムなんよ」

「オレのいた世界のいた魔法とは勝手が違うな」

「玖音さんのいた世界の魔法つてどんな感じやつたの?」

「・・・・・・その話はまた今度な。今する話じやない」

その時の玖音の表情はどこか暗かつた。

2人がフォワード4人に教導しているなのはに近づくと

「あつ。はやてちゃん。玖音さん」

「なのはが教えるのか?」

「うん。わたし教導官だから」

「ふーん・・・・・・」

玖音は丸い機械を相手にしている3人の少女と1人の男の子を見る。

「・・・・・あの4人がフォワード?」

「うん」

「若いな・・・」

「そういう玖音さんは何歳なんや?」

「23歳。はやて。聞いてなかつたけどオレは前線で戦うだろ?仕事の内容は?」

「それは夜説明する予定なんよ。簡単に言えばあの4人が戦つてゐる丸い機械“ガジェット”って言つんやけど。それを倒したりすればいいんよ」

「なるほど」

玖音が納得しているとフォワードの訓練が終わり3人の元にやって来た。

「はい。みんなお疲れ様」

なのはが言つ。4人は声をかける。青い髪の15、6歳の玖音に気がつき

「なのはさん。この人誰ですか?」

それに気がついたオレンジの髪の少女が

「確かに3日前にフェイト隊長が運んできた人ですよね?」

「そうや。玖音さん自己紹介して

はやてに言われ

「オレは如月玖音つて言つんだ。明日から機動六課で働くことなつたんだ。よろしく」

玖音が自己紹介する。

「じゃあ4人も自己紹介しようか。ティアナから」

なのはに言われオレンジの髪の少女が

「ティアナ・ランスター二等陸士です」

次に青い髪の少女が

「スバル・ナカジマ二等陸士です!」

と元気な声で自己紹介する。

「エリオ・モンティアル二等陸士です!」

赤い髪の男の子がスバルに負けないくらい元気な声で自己紹介する。「き、キヤロ・ル・ルシエ三等陸士です。この子はフリードって言います。」

最後に桃色の髪の女の子が自己紹介する。それに応じて隣にいた小さな竜が

「キュピ——！」

と声をあげる。

「玖音さんは4人と同じで前線で働いて貢う予定なんよ」はやでが言う。

「じゃあ。そろそろ訓練再開しようか」

「——はいっ！」

なのはの一言で4人は訓練に戻つていく。

玖音とはやはじばらく訓練再開を見学することにした。

「へえ、なかなか粒が揃つてんな」

玖音が4人の訓練を見て関心する。

「そうやろ4人とも未来のエースやからな」

「なるほど」

2人が話していると

「主。こんなところにおられましたか」

「はやで。コイツ誰？」

ピンクの髪にポーテールの女性と赤いおさげの髪の女の子がやってきた。

「シグナム。こらー・ヴィータ！初対面の人失礼やろ！」

はやでが赤いおさげの少女を叱る。

「わりいわりい」

「確かに3日前に運ばれて来た者ですね」

「うん。如月玖音さんって言うんや。民間協力者として明日から前线で働いてもらつんや」

はやてが2人に説明する。するとシグナムが玖音が腰に差している刀に気がつき

「如月。それはお前の刀か?」

「ん? そうだ。オレの相棒みたいなもんだ」と2本の刀を見せる。鞘に朱と蒼のラインが入つており柄にも同じ色の刺繡が入つている。

するとシグナムが

「主はやて。如月と模擬戦をさせていただけませんか?」

「あ! それ、あたしも言おうとしたのに!」

とシグナムとヴィータが言った。

「シグナム! ? ヴィータ! ? 何言つてるんや! ? 玖音さんはつこさつき起きたばつかりなんよ!」

とはやてがその提案を拒否しようとすると

「べつにオレは良いけど? 組み手みたいなもんだろ?」

と玖音がしれつと言つた。

「玖音さん! ?」

「決まりですね」

シグナムが嬉しそうに笑つた。

「さつきの話だと不知火と時雨はデバイスつてやつになつたんだろ? だつたら平氣だ。それに実力もわからねえ奴に背中は預けられねえしな」

玖音もやる氣満々だ。はやてはため息をついて

「そこまで言つんなら模擬戦は許可するけどケガだけはしないよ」
にな。後、これは玖音の実力テストも兼ねてるからな」と言った。

「ありがとうござります。如月。私がヴィータのどちらと戦う?」

シグナムが尋ねる。

「ん? 2対1で構わねえぞ」

と玖音がとんでもないことを言つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0473ba/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS 時空を越えた槍使い
2012年1月10日23時45分発行